

金大考古

第41号

修士論文概要

「西アジアにおける中央ユーラシア型服飾の研究」

柳生 俊樹

本論は、中央ユーラシア草原地帯の服飾文化が、西アジア地域に伝播し、普及・定着していく過程に関する基礎的研究である。草原地帯特有の衣服は、長袖で丈の短い上衣とズボンの組み合わせが基本であり、現在の「洋装」の原型と考えられているものである。本論では、上衣とズボン、それらに伴う靴・外套・帯、その他装身具などの服飾品を、「中央ユーラシア型服飾」と総称し、分析の対象とする。

本論において、「西アジア伝播」が注視されるのは、以下の理由による。すなわち、西アジアにおいては、東アジアやヨーロッパに先駆けて、中央ユーラシア型衣服が導入され、やがて正装化される。このことは、中央ユーラシア型衣服を洋服の原型とする観点からは、その後、洋服が世界を席巻することの第一段階に他ならない。したがって、西アジア伝播に関する体系的な研究が、まず重要となるのである。

本論の内容は、1)中央ユーラシア草原地帯と西アジアにおける服飾に関する資料を集成・分析し、その上で、2)西アジアにおける中央ユーラシア型服飾の普及の背景について若干の考察を加える、というものである。結論を略述すれば、以下のようなになる。

西アジアにおける中央ユーラシア型服飾の諸要素を個別に観察すると、パルティア時代に多様化が認められる。例えば、上着形式における左衽（中央ユーラシア系）と丸首（西アジア系）の併存、ギリシア・ローマ系要素（e.g. マント）との結びつき、などである。

このような「多様化」は、西アジアにおける普及と正装化の背景についての、これまでの漠然とした理解（パルティア＝遊牧民の侵入による）に若干の修正を迫るものである。つまり、草原地帯の服飾文化が、そのままの形で西アジアに持ち込まれただけではないことを想定させるのである。

そこで、本論においては、パルティア時代における戦車の衰退と騎兵の役割の増大、さらに、騎馬像（帝王騎馬像）の流行に注目した。このことは、車行に対する騎行の「優位化」を反映するものであろう。そして、新たに中央ユーラシア型服飾の普及とのパラレルな展開を指摘した。実は、その騎行の「優位化」に、「普及」を理解するためのポイントがあると考ええる。つまり、中央ユーラシア型服飾の普及（乗馬用衣装 正装）に当たって、このような馬文化の変容（車行 騎行）が、大きな要因の一つとなったのではないか。それが、本論における結論であり、問題提起である。